青山学院大学地球社会共生学部　2024 年度推薦図書一覧

地球社会共生学部の教員が新入生の皆さんにお勧めする図書です。入学するまでに、ぜひ一冊でも多く読んでみてください。

『あなたがどこから来たのかわかる本~心臓外科医と探る生命の神秘~』

今中和人/著、いのちのことば社

人類は本当に偶然の積み重ねや段階的な進化を経て生まれたのでしょうか。東大医学部卒で心臓外科医の著者は、本書において、極めて精巧に造られている心臓などの様子を分かり易く説明しながら、人類は創造主である神により造られたと主張しています。また、進化論の「証拠」として日本で教えられているものは、どれも誤りか極端に疑わしいことは専門家の間では常識であると語っています。私たちは、「科学」という言葉を聞くと、正しいものという先入観を持ってしまう傾向があります。しかし、世の中の常識や定説と言われることでも鵜呑みにせずに、「本当にそうなのだろうか」と考えてみることも、真理を追究する際には重要です。本書を読んで、そのような姿勢を養ってみてはいかがでしょうか。

―村上広史（地理空間情報科学）

『ヴェニスの商人』

ウィリアム・シェイクスピア/著、新潮文庫、ちくま文庫他

市場メカニズムによる経済は、人々が近代的な考え方を持つようになって登場した。とりわけキリスト教における宗教改革の影響が大きいとされる。マックス・ヴェーバーによる論考（『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）が有名だが、文学の世界からもそうした変化を知ることができる。ビジネスにも長けていた文豪シェイクスピアの作品には、それらがよく描かれている。次点としては『リア王』、『から騒ぎ』を推薦したい。

―山下隆之（理論経済学）

『江戸のお金の物語』

鈴木浩三/著、新潮文庫、日経プレミアシリーズ

普段、皆さんが何気なく使っている「お金」。実は、日本では江戸時代にすでに高度な貨幣経済が進んでいました。江戸時代は、金、銀、銭がお金として使われており、それぞれの価値が違っていたので、交換比率（つまり、今でいう為替レート）が定められていました。しかも、この交換比率はいつも変化していたとのこと。そう、現在の変動為替レート制と同じです！本書の著者は、「江戸時代に培われたお金の使い方・使われ方を含む資本主義的な土壌の上に、明治の発展があって、それが現代の日本に脈々とつながっている」（p. 240）と述べています。第二次世界

停戦後、日本が急速に経済発展を実現できたのは、江戸時代に高度な金融の仕組みが根付いていたことと深い関係がありそうです。江戸時代にタイムスリップして、お金の観点から日本史をのぞいてみませんか。

―中川利香（金融論、開発経済学、アジア経済論）

『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか: 空間の絵本学』

矢野 智司、 佐々木 美砂/著、勁草書房

絵本を構成する絵と文字を、空間構成のプロセスという視点で分析した内容ですが、社会学や宗教学も巻き込んで、どうして絵本は動物が次々に出てくるのか、どうして絵本は子供を夢中にさせるのか、といった謎が徐々に明らかにされていきます。これらの謎が解明されると、絵本は、見返りを求めない贈与や愛情、遊びを表現するのに適したメディアであり、他にないユニークさがあると分かります。絵本が題材ということで、分かりやすいお話を例にとりながら、著者独自の分析の切り口で解説が進んでいくため、不思議と動物たちの光景が色鮮やかに頭の中に浮かび、とても読みやすいものになっています。また、絵本学という学問ではありますが、これから大学で学びをしていくみなさんにとって、研究とはこういうものと学べる一冊にもなっているのではないかと思います。

―髙田百合奈（情報デザイン）

『外資系トップコンサルタントが教える英文履歴書完全マニュアル』

松永エリック・匡史、門田裕次/著、ナツメ社

自分は、今どうしたいのか、何を目指しているのか、そのためにどうありたいかに迷っていませんか？学生から一番質問の多い業界や企業の選び方からキャリアデザインまで、英文履歴書のノウハウを越えた内容になっています。外資系コンサルで 20 年以上の経験で数多くの企業トップとプロジェクトを遂行してきた筆者の経験をベースにした実践的な本です。

―松永エリック・匡史（(国際ビジネス・デジタルイノベーション・アート思考）

『学校って何だろう　―教育の社会学入門―』

苅谷剛彦/著、ちくま文庫

「どうして勉強しなければいけないの?」「なぜ毎日学校へ通わなければいけないの?」「校則はなぜあるの?」「教科書ってほんとに必要なの?」皆さんは、このような疑問を感じたことがありますか。また、こうした疑問について、立ち止まってじっくりと考えたことはありますか。

本書は、「毎日中学生新聞」に 1997 年から 1998 年にかけて連載された苅谷氏の文章をまとめたものです。章題には、皆さんが一度は抱いたことがあるであろう、冒頭に挙げたような学校や

勉強についての疑問が並んでいます。この本に、それらの答えは書いてありません。しかし、この一冊を手がかりに、ぜひそれらの「常識」を問い直してみてください。当たり前のことを、一度足を止めてなぜだろうと考えることは、「学ぶことの意味」をふたたび摑みとる助けとなるはずです。

―橋本彩花（比較教育学）

『危機の二十年―理想と現実』

E.H.カー/著、岩波書店

本書は、国際関係論（国際政治学）の創成期において最も大きな影響を及ぼした古典のひとつとされ、多くの学者にとって国際関係論の出発点そのものを意味する。英国で出発された初版から 80 年経った現在でも、国際関係論の入門書として紹介されることが多い。著者は、イギリスの外交官として活躍したのち、ジャーナリストなどを経て学者に転身し、外交史を中心に歴史学の研究で大きな注目を集めた。本書の当初の目的は、第一次世界大戦後のヨーロッパの世論に、なぜこの大戦が勃発したかということを説明したうえで、平和と安定が持続する国際秩序を形成するために必要な知的貢献を提供するものであった。皮肉にも本書の準備中に、ヨーロッパ各国の政治家や知識人の予想に反して、第二次世界大戦が勃発したが、これによって本書で示される概念などが国際関係の分析に一定の有効性をもつと学問的に認識された。本書の根幹は 21 世紀の問題を考えるうえでも大きな示唆を与える。

―幸地茂（国際関係論・ラテンアメリカの地域研究）

『くらしのアナキズム』

松村圭一郎/著、ミシマ社

国家とは何のためにあるのか？本当に必要なのか？皆さんは考えたことはありますか？そもそも地球の隅々まで国境線が引かれ、現在の形での国家が成立したのは歴史上ではごく最近ことです。

この著書は、人類学の視点から国家について考察しています。ただし、本書で触れられているのは無政府状態を目指して革命を起こした歴史上のアナキストたちの思想や運動ではありません。人類学者である筆者が、エチオピアのある部族社会でのフィールドワークを通じて知った、部族の人々が喧嘩や揉め事も、災いや生活の困難も、国の法制度に頼ることなく、自分たちで話し合い、互いに手を差しのべあって解決しようとする日々の営みを書き綴っています。

国家による統治と支配、庇護や分配が当たり前のように受け入れられている今日ですが、我々がどんな世界を生きているのかを問い直すきっかけを与えてくれるかもしれません。

―菅野美佐子（文化人類学・ジェンダー学）

『経度への挑戦』

デーヴァ・ソベル/著、藤井留美/訳、角川文庫

現代は、GPS をはじめとした測位衛星により、屋外ならどこででも緯度・経度が数 m 程度の誤差で分かるようになっています。しかし、大航海時代真っただ中の 18 世紀初頭でも、航海中に船のいる場所の経度を知ることは困難を極め、船が位置を間違えて座礁し、一晩で 2,000 人とも言われる人たちが命を落とすこともありました。この問題を重視した大英帝国は、多額の懸賞金を出して、経度の計測法を公募しました。本書は、並み居る科学者たちが四苦八苦する中で、英国の田舎の時計職人 John Harrison が、権威ある科学者たちによる差別や偏見に遭いながらも、航海中でも狂わない精巧な時計を忍耐強く開発していくという実話を描いたものです。彼の時計により、大英帝国は高度な航海術を手に入れ、海洋の覇権を握っていくことになります。閉塞感のある社会では、既存の枠組みや固定観念を突き破り、次の一歩を切り開く人材が必要です。この本を読んで、未来の Breakthrough を成し遂げてください。

―村上広史（地理空間情報科学）

『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』

ガイ・ドイッチャー/著、早川書房

みなさんは英語を初めて学んだとき、日本語と英語のどのような違いに気づきましたか。文法、という人もいると思いますが、本書は単語やその単語の言い回しの違いに焦点を当てています。日本語と外国語で全く同じ意味をあらわす単語もあれば、そうではない単語もありますね。たとえば「いただきます」は日本独特の概念で、翻訳として利用されることもある英語の「Let's eat.」や、イタリア語の「Buon appetite.」といった表現とは異なります。生まれたときは同じ人間で、同じ遺伝子を持つにもかかわらず、なぜ、そしてどのようにその国や地域独特の言い方が生まれてくるのか考えたことはありますか。本書は概念や認識の違いを生む過程を、色や空間などを利用して興味深く紹介してくれています。原本は２０１０年に発刊され、ハヤカワ文庫としての翻訳本が２０２２年に出版されました。入学後の大学の授業でも、みなさんと共に言葉の不思議について語り合えることを楽しみにしています。

―菊池尚代（言語学・教育学・メディア）

『ザ・コールデスト・ウィンター　朝鮮戦争』上下

ディヴィッド・ハルバースタム/著、山田耕介、山田侑平/訳、文春文庫（文藝春秋）

著者（1934～2007）は米国を代表するジャーナリスト。徹底的な取材で米国政府とベトナム戦争、米国メディア、日米自動車戦争など数々のテーマを描いてきたが、遺作となる本書は、やはり綿密なインタビューと膨大な資料に基づき、「現在も政治的・文化的にアメリカ人の意識の外にとどまったまま」（著者）である朝鮮戦争を事細かに再現していく。マッカーサーとその取

り巻き、金日成、スターリン、毛沢東、そして現場の名もなき兵士たち……。他の著作同様、エピソードの積み重ねで話を展開する本書は読み物としても面白いうえ、現在の朝鮮半島情勢を理解するために様々な示唆を与えてくれる。

―福原直樹（ジャーナリズム論）

『深夜特急』

沢木耕太郎/著、新潮文庫

学生時代に私が東南アジアを放浪するきっかけとなった、いわゆるバックパッカーのバイブルとして語り継がれる偉大なる名著です。「インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗り合いバスで行く。」主人公はなぜこの様な旅を行おうと思ったのか。道中で何が起こったのか。そして見事ゴールできたのか。読んでからのお楽しみです。特に東アジア地域を旅する第１巻及び第２巻がオススメです。ただし、一度読み出すと（主人公と一緒に２万キロの旅へ出発すると）止まりませんので、そこだけが要注意です。

―林拓也（経済史・経営史）

『人類の起源　古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』

篠田謙一/著、中公新書

本書は、近年発達の著しい、DNA やゲノム解析の技術によってもたらされた、最新の古代 DNA 研究の成果に基づいて、人類の起源、進化史、人類の祖先、そして初期サピエンス集団の形成と世界各地への展開、日本列島集団の起源等を紹介している。

本書を読めば、ホモ・サピエンスは、それに先だって形成された他の人類種（ネアンデルタールやデニソワ人）と同時期に存在し、複雑に交配しながら形成されていることや、人類種の「出アフリカ」以降の、多様で複雑な移動ルート、また日本列島集団を形成した縄文人の中にも多様な集団があったことなどがわかる。分析手法の変化を誠実に記しながら書き進めているが、読んでいると遥か遠い過去が目の前に浮かび、いろいろな想像をかきたててくれる。「終章」では、この分野がもたらす新たな理解が、社会について何を考えさせることにつながるのかについての示唆があり、ぜひ一読してほしい。

―岡本真佐子（文化人類学・文化政策）

『世界史 上』、『世界史 下』

ウィリアム・H・マクニール/著、増田義郎、佐々木昭夫/訳、中公文庫

国際関係論を学ぶにあたり、世界史の知識は必須です。高校までに学んだ世界史の知識をさらに広め、深めるにあたり、マクニールの『世界史』は、適しています。

マクニールの文明史を中心とした俯瞰的な視点は、様々な事象の地域的、そして歴史的連関の有機的な理解を高めてくれます。地理、宗教、芸術さらに人間性をも考察に入れた生き生きとした歴史叙述からは、権力や権威の興亡は勿論のこと、人類の生きてきた証としての世界史を実に豊かに学ぶことができます。

本書は、関連地図、写真や年表を多く紹介していますが、より良く勉強するために、世界史地図なども手元に置きながら読み進めると、さらに分かりやすくなるでしょう。通読することをお勧めしますが、関心のある地域、テーマ、時代の章から読んでみるのもよいでしょう。これまでの世界史の勉強で理解が難しかった時代、事象から読んでみることもよいでしょう。

―熊谷奈緒子（国際関係論）

『世界を救う７人の日本人－国際貢献の教科書』

池上彰/著、朝日新聞出版

本書は、水、母子保健、食料生産、基礎教育、産業振興等の分野で世界で活躍するプロフェショナル８名の言葉を通して、途上国における援助の実際、日本の援助のアプローチを教えてくれる。一般に援助について尋ねると、相手国の人に資金を渡すだけではだめ、あるいは、施設や設備の供与のみならず、技術や知識を教えるべきなどの感想をもらうことがある。援助の現場ではこれらが当然のことになって久しい。むしろ、プロの現場では、途上国の人々が自分たちが整備した自分たちの設備として当事者意識をもてるよう、地元の文化や社会のなかで根付く保健医療サービス、運営ノウハウになるよう、相手側に寄り添う現場主義に徹している。援助することは一方的な「貢献」ではない。日本国内でもますます求められる社会的起業、イノベーションのヒントがある。援助の向こう側にはこれからの世界経済を牽引しうる新たな市場がある。私たちが国際協力から学ぶものは多い。

―桑島京子（国際協力・社会開発論・東アジア）

『正しく知る地球温暖化―誤った地球温暖化論に惑わされないために』

赤祖父俊一/著、誠文堂新光社

最近の「異常気象」により、地球温暖化に関する対策の必要性が叫ばれています。その中で、温暖化の原因が、人間が化石燃料を消費することによって排出される二酸化炭素だと断定した論調が主流になっています。本書は、現在進行している温暖化の大部分が人間による二酸化炭素の排出によるものではなく自然変動であるとして、二酸化炭素排出規制の流れを引き起こして

いる一部の「科学者」やそれに安易に同調している政治家やマスコミなどに正面から異議を唱えています。長年地球物理学の発展に大きな貢献をしてきた科学者である著者が、「学問の進歩にとって大切なことは議論すること」という姿勢を貫き、冷静に観測データと向き合い、世の中の常識や定説と言われることを鵜呑みにせず、真理を探求しようとする姿は、これからの不透明かつ多様化する社会を地球人として生き抜く若者たちに大いに参考になるでしょう。

―村上広史（地理空間情報科学）

『ダメになる人類学』

吉野晃/監修、北樹出版

あれをしてはダメ、こうでないとダメ、ダメな物、ダメな人。世の中には、たくさんの「ダメ」があふれています。私たちの多くは、ダメなことをしないように、ダメにならないように、常日頃、ダメを避けているかと思います。本書は、フィールドワークを行う研究者が、世界各地で遭遇したダメなエピソードの事例集です。例えば、「モテなくてはダメですか」といったジェンダーに関するものから、「自分が世界の中心じゃダメですか」といった国家やガバナンスに関する事例が取り上げられています。これらのダメをよく考えてみると、何がダメでダメでないのかは、場所、時には時代によって異なるものだということがわかります。ダメとダメでないの境界は、社会や時代に強く影響されているものなのです。物事が上手く進まない時、自分がダメだと感じるとき、別の視点でそれらを捉えてみると、新しいことが見えてくるかもしれません。

―大澤由実（人類学・民族植物学・食文化）

『小さな地球の大きな世界：プラネタリー・バウンダリーと持続可能な開発』

J.ロックストローム・M.クルム/著、武内和彦、石井菜穂子/監修、谷淳也、森秀行/訳、丸善出版

本書は 2015 年に出版された Big World, Small Planet: Abundance Within Planetary Boundaries の翻訳です。昨今、さまざまなメディアで SDGs という言葉を目にする機会が多いと思います。SDGs とは 2015 年に国連で採択された持続可能な開発目標のことです。持続可能な開発の考え方を理解する上で、本書で提示されているプラネタリー・バウンダリー、つまり地球の限界という考え方はとても重要です。本書では、人間活動の急激な拡大が地球システムそのものを脅かしているということ、私たちが将来の世代にわたって成長と発展を続けていくためには、地球システムの機能を大切にする新しい発展の枠組みが必要となっていることなどが述べられています。少し理解が難しいかもしれませんが、本書の科学的データや美しい写真を眺めながら、将来の世界のあり方について考えてみてください。

―升本潔（国際協力・持続可能な開発）

『トランスナショナル・ジャパン－ポピュラー文化がアジアをひらく』

岩渕功一/著、岩波現代文庫

文化の越境が日常化する中で、アジア域内においても、1990 年代以降ポップカルチャーの存在感と相互浸透が顕著になってきました。本書は、このような状況をふまえた上で、1990 年代以降のアジアで消費される日本のポピュラー文化と日本で消費されるアジアのポピュラー文化を多角的に検証しています。国境を超えた相互理解やつながりの構築など、ポップカルチャーの越境がもたらす多くの可能性がある一方で、「他者」としてのアジアの再生産や内向きのナショナリズムとの関係を論じている著者の指摘は、現在の日本で生じている状況に重なり合うものと言えるでしょう。

―齋藤大輔（東南アジア研究・文化人類学・文化社会学）

『日本の構造　50 の統計データで読む国の形』

橘木俊詔/著、講談社現代新書

日本の格差問題の研究で知られる経済学者が、日本の社会と経済について 50 の項目を選び出し、図表を用いながらわかりやすく解説している。それらの図表では、過去から現在までの推移や他の先進国との比較が示されている。例えば、「第 1 章　日本経済の健康診断」の中に「労働時間は 60 年代より約 700 時間ほど減少-日本人は働きすぎか」という項目がある。そこでは、戦後から 2019 年までの約 70 年間にわたる年間労働時間の推移が図示されており、他の先進国の労働時間も数字で示されているため、日本の労働時間がどのように推移してきたか、他国と比べて多いのか少ないのかがわかる。50 も項目があるので、その中から自分の興味のあるテーマを見つけて欲しい。そして、実際の統計データと自分の持っている印象が同じか否か確認してみよう。さらに、日本の構造にどのような問題点があるのか、日本の社会や経済をより良くするためには何が必要であるか考えてみよう。

―咲川可央子（経済学）

『日本の分断 切り離される非大卒若者(レッグス)たち 』

吉川徹/著、光文社新書

本書は、日本の社会における格差の問題が深刻化しつつあること、特に「非大卒の若者＝レッグス」が社会から孤立しつつあることを、SSM 調査と SSP 調査という大規模社会調査データを用いつつ、難解な分析を避けて平易な文章と明快な図式化によって明らかにしている。日本社会の全体像を把握し、そのどこに問題があるのかという見取り図を得るためには格好の入門書である。

―小堀真（社会学）

『反知性主義　アメリカが生んだ「熱病」の正体』

森本あんり/著、新潮社

近年「反知性主義」という言葉がしばしば用いられるようになっている。多くの場合、それは「知性」を欠く、または軽視するような主義・主張を指す言葉として用いられている。しかし、実はこれがアメリカのキリスト教の伝統の中で育まれた言葉であることをご存知だろうか。そしてこの言葉こそがなぜアメリカがトランプ大統領を生んだのかを理解する重要な鍵であることをご存知だろうか。著者の森本あんりは、アメリカに渡ったキリスト教がその土壌の中で「反知性主義」という独自の価値観生み出すに至った過程を丹念に描き出している。本書を読めば、現代社会を理解するためには宗教的な知識が必須であることがよくわかるだろう。今のアメリカを知る上で好適な本である。

―小堀真（社会学）

『文豪の装丁』

NHK「美の壺」制作班/編、NHK 出版

「本」という言葉からみなさんが思い浮かべるものはなんでしょうか？学術書から授教科書、趣味で読む小説や情報を得るためのガイドブックとか色々な「本」がありますが、おそらく皆さんが考えるのは本の「内容」でしょう。しかし、本は内容だけで出来ているわけではありません。本の価値、そして印象を決める大きな要素として大切なのが、装丁（ブックデザイン）です。

明治から昭和初期は、日本の装丁文化が頂点に達した時代でもありました。本書では近代日本を代表する夏目漱石の著作を始め、当時の様々な作家や画家たちの、芸術的な装丁や挿絵が、カラーや白黒の写真で紹介されています。装丁を見るだけでも楽しいのですが、その技術や特徴、作家のこだわりを知ることで、その時代背景はもちろんのこと、今まで知らなかった「本」の世界が広がっていきます。物事を多面的に考えたい人、デザインが与える影響などについて関心がある人におすすめです。

―亀井ダイチ・アンドリュー（歴史学・日本研究・出版文化）

『平和主義とは何か』

松元雅和/著、中公新書

人類の歴史は戦いと共にある。21 世紀は 9.11 のテロと共に始まった。そして排他的ナショナリズムは高まるばかりである。しかし地球社会において人々が共生していくためには平和的な関係が必要である。

日本は第二次世界大戦以降今日まで、平和主義を非常に重んじながら歩んできた。青山学院大学は日本を代表するキリスト教大学であるが、日本のキリスト教界は更に強く平和主義を主張

している。しかし平和主義とは何なのか、またどのような種類の平和主義があるのかについてはよく理解できていないことが多い。

本書は、平和主義とは何か、また平和主義に対峙する正戦論と現実主義を広く類型化、検討し、わかりやすく整理している。平和主義も正戦論もキリスト教にそのルーツがあるのであるが、著者はそのこともよく押さえてかなりフェアな紹介をしている。平和的共存を考えるために一読を勧めたい。

—藤原淳賀（キリスト教社会倫理）

『「放蕩」する神』

ティモシー・ケラー/著、廣橋麻子/訳、いのちのことば社

本書は、新約聖書のルカの福音書に記されたイエス・キリストによる「放蕩息子のたとえ」の解説です。通常は、「放蕩息子」である弟の話に焦点を当てて語られるたとえ話ですが、著者はこのたとえ話が本来は兄に相当する聴衆に向けられているとして、兄の心の奥底を描写しながら聖書が教える「罪」の本質を明らかにしています。「共生」を考えるうえで避けて通れない「人間の本性」に関して、極めて深い洞察が得られ、イエス・キリストの教えの深さに圧倒されること間違いなしです。

聖書は世界のベストセラーですので、地球人として必読の書ですが、今まで聖書を読んだことがない人も、この本を読むことで聖書を身近に感じられるはずです。

—村上広史（地理空間情報科学）

『マイルス・デイビス自叙伝(1),(2)』

マイルス・デイビス、クインシー・トループ/著、宝島社文庫

ジャズの帝王マイルス・デイビスが自らの人生を語った貴重な本です。私は中学生からプロのミュージシャンとして音楽の仕事を始めました。ずっと夢はマイルスとプレイする事で米国に留学した数年後に帝王マイルスはその生涯を閉じました。ジャズの、いや音楽の歴史の一つが幕をおろした瞬間でした。この本では音楽はもちろん、その破天荒な生き方、孤独、そして儚い愛と様々な出来事や心中が生々しく語られています。私は彼の型にはまらない生き方から、多大な影響を受けました。ミュージシャンからシステムエンジニア、経営コンサルタント、そしてこの地球社会共生学部で教鞭を執っている自由な生き方はマイルスの奔放さからの影響です。今でも人生に迷った時、今の自分に自信がなくなったときに手にする大切な本です。原本の『MILES The Autobiography』MILES DAVIS WITH QUINCY TROUPE もマイルスの生の声を聞きたいときにオススメです。

—松永エリック・匡史（(国際ビジネス・デジタルイノベーション・アート思考）

『私の個人主義』

夏目漱石/著、講談社学術文庫

これは、夏目漱石が晩年、学習院の学生に行った講演です。自己の進むべき道の発見、他に追従しない自分なりの考えの確立に到るまでの自己の煩悶、紆余曲折の過程を率直に語り、そして英国留学中に目覚めた自己本位の考えを紹介しています。

漱石は、自己本位とは、自分の個性を発展させる拠点の確立であると説き、さらに自己本位は、他人の個性の尊重であり、社会に対する義務、責任を伴うものであることも強調しています。そして自己本位が、自分の個性に由来するゆえにもたらす自信と幸福について説いています。漱石は、迷いがあっても自己本位に到達するまで勇猛に徹底的に突き進むことの重要性を説いています。

地球社会、日本のために役に立ちたいという情熱を、学問的職業的方向や方法に繋げるには、様々な葛藤や困難もあるかと思います。この講演は、学問、仕事、そして生き方の確立において、各人にとって勇気とインスピレーションの源泉となるでしょう。

―熊谷奈緒子（国際関係論）

『FACTFULNESS 10 の思い込みを越え、データを基に世界を正しく見る習慣』

ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、アンナ・ロスリング・ロンランド/著、上杉周作、関美和/訳、日経 BP 社

私たちが世界で起こっている物事について考える時、自分の思い込みやイメージを持ち込んでいることが少なくない。私自身は前職で途上国と呼ばれる場所を転々としたが、実際に行く前にその場所について持っていた印象や知識でさえ当てはまらないということがよくあった。本書では、例えば「世界はどんどん悪くなっている」という思い込みをクイズにし、データを用いながら正解を説明していく。皆さんは、世界で極度の貧困状態にある人々の割合についてどのような印象を持っているだろうか。正解をここで記すことはしないが、思い込みを一旦外して物事を見てみるということは、地球社会共生を学んでいく皆さんや教員にとっても大切なことなのではないだろうか。厚みがある本でともすると難しいという印象を与える本かもしれない。しかし一件の説明は２～３ページで完結し、またどこから読んでも理解できる構成になっている。

―堀江正伸（国際関係論・人文地理学）

『Never Lost Again　グーグルマップ誕生』

ビル・キルディ/著、TAC 出版

Pokémon GO を生み出したジョン・ハンケがこの本の主人公。なぜ彼が Google Earth を作り、Google Maps を作り、そしてあっさりと Google を辞めて位置情報ゲームを軸に新たな世界を作り出そうとしたのか、今まであまり表に出てこなかった 2000 年前後のウェブ地図と地理情

報システムを巡る様々な攻防と変遷、そしてジョンが目指す未来が本書には赤裸々に語られています。著者でもありジョンのビジネスパートナーでもあるビル・キルディが Google から Niantic 社に移籍した後だからこそ、Google 内部で起きた当時の権力争いが淡々と記されており、ノンフィクション作品として読み応えのある一冊です。

—古橋大地（地理空間情報科学・地図学・リモートセンシング）

『The First Samurai: The Life and Legend of the Warrior Rebel Taira Masakado』

Karl Friday/著、John Wiley & Sons

海外で日本のイメージについて語られるとき、よく使われるイメージのひとつが「サムライ」です。アニメや漫画、また野球の日本代表「侍ジャパン」という名称を通じて世界中で人気も認知度も高い存在ですが、はたしてその「サムライ」とは一体どういうもので、どう誕生してきたのでしょうか？

そうした「歴史上の本当の武士」の姿に迫ったのがこの本です。著者のフライデーは英語圏における侍研究の第一人者で、平将門を中心に歴史の実像と虚像の差異や、人物を通しての歴史研究のあり方などを示してくれています。これは典型的なイメージを超え、世界の現実を学んでいかなくてはならない皆さんにとって、重要な問題でもあります。

英語ということで少々敷居が高いかもしれませんが、比較的短く、学術英語としてはかなり分かりやすく書かれています。日本の歴史について英語で語れるようになりたい人には、おすすめです。

—亀井ダイチ・アンドリュー（歴史学・日本研究・出版文化）